



# C.M.D - case II -

---

qedqed

---

## 登場人物

---

### 登場人物

うみっち

本名：海水 さより（うみみず さより）

性別：女性

趣味：推理小説を読む、リアル脱出ゲーム参加等のミステリー全般

出身：兵庫県（現在も両親と姉と実家暮らし）

在籍：北摂国立大学法学部法学科1回生

近況①：料理の腕前が少し上がった。

近況②：姉が新しいお店を出店した。

近況③：ある事件に巻き込まれるが、無事解決（case 1 参照）

やまっち

本名：山土 ゆりね（やまつち ゆりね）

性別：女性

趣味：料理、カフェ巡り

出身：京都府（現在はひとり暮らし）

在籍：北摂国立大学理学部数学科1回生

近況①：最近はパン料理に凝っている。

近況②：ダイエットは成功しつつある。

近況③：ある事件に巻き込まれるが、無事解決（case 1 参照）。

そらっち

本名：宙空 れいら（そらく れいら）

性別：女性

趣味：ダーツ、ドライブ

出身：大阪府（現在はひとり暮らし）

在籍：北摂国立大学医学部医学科1回生

近況①：ダーツクラブに入会した。

近況②：大学入学後も男女問わず告白され続ける。

近況③：ある事件に遭遇する（case 1 参照）。

「はあ〜。」

そらっちは大きくため息をついた。

「どうしたの？」

私うみっちは”きのこどっさりのクリームソースパスタ”を食べながら尋ねた。

「悩み事なら相談に乗るよ！」

やまっちは自分で作ってきたサンドイッチを頬張りながら力強く言った。

おいしそうなBLTサンド...いや、それよりも気になるのはおでこ。

結構腫れてきている。聞けば、大学に来る途中に突如”リーマン予想”に夢中になり、気付けば電柱にぶつかっていたそうだ。

数学に夢中になるのは結構だけど、周りが見えなくなるのは危険だ。

それに...本人はおでこを気にしていないけど、こちらが気になる。

ここは北摂国立大学池田キャンパスの食堂”タベルナ”。イタリアンを主に出す食堂だ。

ちなみに、そらっちは”あさりと鮭の真っ赤なトマトソースパスタ”を頼んでいる。

「う〜ん、ここでは話しづらい内容だから...。」

「じゃあ、授業終わってからやまっちと一緒にそらっちのマンションに行くよ。そらっちも今日は授業早く終わる日でしょ？やまっちも今日はバイトない日だよね？」

「うん、大丈夫！」とやまっち。それを聞いて、そらっちも

「ふたりがいいなら、聞いてもらおうかな？」

「じゃあ、決まり！」

やまっちと私は授業後、そらっちの学生マンションを訪れた。

「それにしても、いつ来てもきれいでオシャレだよね〜。」

やまっちはソファに座りながら心底感心して言った。

やまっちもひとり暮らしをしているので、自分の部屋と比較しているのかもしれない。

ただ、やまっちの部屋にも何回か行ってるけど、十分きれいにしている。

実家暮らしで未だに母親から「少しは掃除しなさい！」と言われてる私とは大違いだ。

しかも、前に来た時には無かった有名玩具メーカー”アテナ”のクマのぬいぐるみ”いこかもん”もある。とっても可愛い！

私も常々欲しいと思っているのだが、お高いので手が出せないでいる。

聞けば、懸賞に当たったらしく、一昨日送ってきたらしい。”いこかもん”は世界にふたつと同じ手触りのものがないというぬいぐるみで、いろいろなバージョンがあり、世界中に愛好家がいる。

まあ、本人は興味がなく懸賞に応募したことも身に覚えがないらしい。素直に羨ましい...

「じゃあ、お茶淹れるね。」

そらっちは立ち上がって、テキパキとティーカップを準備する。

赤いバラがデザインされて、上品そうで...高そうなカップである。

「あっ、チョコ買ってんだ。」と、そらっちは冷蔵庫を開ける。

中には瑞々しいきゅうり、新鮮なレタス、真っ赤なトマト...そらっちは野菜好きだよなあ。

外見だけじゃなく、中身もきれいって感じかな。

「コーヒーでいい？」

「うん。」

「あれっ？砂糖がない...おかしいなあ。」

「私、砂糖要らないから別にいいよ。」

「やまっちはダイエット中だからそれでいいだろうけど、私ブラック飲めないんだよお。」

「あっ、あったあった。左の引き出しに。いつも右の引き出しに入れてるのおかしいなあ。」

「そらっちにしておちょこちょいだね。」

「う〜ん、ここ数日多いのよ...。特定の場所にいつも置いていたものが別の場所にあることが。」

そらっちが淹れてくれたコーヒーを飲みながら、いよいよ本題に入った。

「ストーカーかもってほんとなの？」

「うん...。」

「いつから？」

「そうかもしれないと思ったのは3日前から。駅からここまで歩いて帰ってくるんだけど、駅からずっと視線を感じてて...。もちろん気のせいかもしれないって思ったけど、次の日もそうで...。」

「他には？」

「昨日からはこんなメモも郵便受けに入るようになって...。」

「見せて。」

私はそらっちから問題のメモを受け取った。やまっちも覗き込む。

親愛なるれいら様

今日は駅前のコンビニで、ロイヤルミルクティーを2本買われましたね。

お好きなのでしょうか？

私は甘いものは嫌いなのですが、好きになるよう努力いたします。

昨日は遅くまで電気が付いておりましたが、お勉強のため夜更かしでしょうか？

お勉強に熱心なのは結構ですが、睡眠不足は美容の敵です。

れいら様の美貌が損なわれることは私にとっての悪夢です。

「勉強じゃなくて、お友達と話してただけなんだけどね。で、これが今日の朝届いた分。」

親愛なるれいら様

昨日はスーパーマーケットまで買い物に行かれましたね。

トマトを買われておりましたが、あんな緑色のトマトなど選ばずに、

もっと熟した赤いトマトを選んでいただきたいですね。

それはそうと、れいら様は料理も得意なのでしょうか？

私のような者にも手料理を食す権利はありますでしょうか？

もし、それが実現すれば天にも昇る心地でしょう。

「決定！間違いなくストーカー。」

やまっちは断言した。

「お父さんに相談してみたら？」

そらっちには頼りになる父親がいる。私も前の事件で助けられたのだ。

「何か被害にあったわけじゃないし、ちょっと言いづらくて。迷惑は掛けたくないし。」

「う～ん、確かに難しいところだけど。でも...」

私が言い終わらないうちに、ふいに部屋が揺れた。

地震だ！！本棚から本やDVDが飛び出してきた。

「痛っ！」

やまっちの頭に本が落ちてきた。

数秒後、揺れは治まった。

「やまっち、大丈夫？」

「うん、大丈夫大丈夫。結構揺れたね。」

やまっちは大したことなくて何よりだったが、そらっちは部屋を見渡して、

「一旦話し合いはストップして、整理整頓しないといけないかなあ。」

と、ため息交じりに言った。

その時、そらっちのスマホに着信音が。

「あっ、赤緒さんからだ。」

そらっちは受信相手を確認してから電話に出た。

「もしもし...あっ、今日でしたね。...いえいえ、大丈夫です。...5分後ですね。分かりました。お待ちしています。」

「どうしたの？」

そらっちが電話を切り終えてから、私は尋ねた。

「ごめん！ダーツクラブのメンバーから。今日、私の部屋で翌月のイベント内容を話し合う予定

になっていたの。ストーカーのことが気になって、すっかり忘れ...

そらっちは握ったままのスマホを見つめている。

「どうかしたの？」

「実は一昨日2回公衆電話から着信があって。一応出たんだけど、無言のまま切れちゃって。」  
履歴を見てみると、18:42と19:03に着信があったようだ。

「それもストーカーの仕業だよ！やっぱり、事は一刻を争うようだね！」  
やまっちの意見に、私も同感だった。

ピンポン

そう思っていたのだが、どうやらダーツクラブのメンバーが到着してしまったようだ。  
そらっちはインターホンの画面で確認し、ドアを開けた。そこには3人の男女がいた。  
そらっちは、私たちと彼らを丁寧に紹介してくれた。

彼らは、それぞれ

赤緒 栄治（あかお えいじ）フリーター・男性・27歳

青藤 美波里（あおふじびばり）芦屋医科大学2回生・女性・19歳

黄柳 椎介（きやなぎしいすけ）なんば工科大学1回生・男性・18歳

3人ともそらっちの部屋を訪れるのは初めてとのことだった。

「みなさん、来ていただいたのに申し訳ないんですけど、さっきの地震で部屋がめちゃくちゃ  
になっちゃって、だから近くの喫茶店で話し合いませんか？」

うみっちは部屋を見せながら言った。

「あー、結構揺れたね。」と赤緒さんが耳からイヤホンを外しながら言った。音楽でも聞いていた  
のだろうか。それにしても...部屋の中をいやにキョロキョロして見てるな。嫌な感じ！

「地震あったの？外にいたから気付かなかったわ。」と青藤さん。

「あちゃー、ひどい状態ですね。喫茶店に行くよりも、れいらちゃんの部屋を片付けませんか？」  
黄柳さんは部屋を見渡しながら言った。「れいらちゃん」と気安く呼んだことは...黙認した。

「それもそうね。赤緒さんは？」

「おう。俺もそれでいいよ。」

「そんな悪いですよ...。」

「いいよいいよ。今日だってれいらちゃんは部屋を提供するのを快く引き受けてくれたわけ  
だし。」

とりあえず一旦帰ろうとしていた私とやまっちも、それなら手伝おっかということになった。  
私はまず“いこかもん”が汚れないように袋に入れ、玄関近くに置いておいた。

そらっちは知らないだろうけど、結構高いんだから大切に扱わなきゃね。

そらっちは勉強机、やまっちと赤緒さんは本棚、青藤さんと黄柳さん、そして私は食器棚を担当することになった。

食器棚は結構な荒れ方だった。割れてしまっているものもある。

さっき私たちが使っていたものと同じデザインのものもいくつか割れていた。

青藤さんは指を切らないように慎重に欠片を集める。

「このカップ、素敵なデザインなのに残念ね。」

「ほんとそうですよね。私たちもさっきまで同じデザインのカップでコーヒーを飲んでたんです。」

私はテーブルに置かれたカップを見ながら言った。

「そんなに良いデザインかな？これ、バラでしょ？もっとバラらしい色にしたらいいのに...。」

黄柳さんは首をかしげながら欠片を眺めた。

「そう？十分バラっぽいと思うけど。まあ、人それぞれだしね。それより、さっさと片付けちゃいましょ。」

本棚の方は順調に片付いてるかな、と私はそちらに目をやる。

「そらっち、これらの本やDVDって並び順とかあるの？」とやまっち。

「中段と下段に本、上段にDVDを入れてくれたらいいよ。順番とかは気せずどんどん入れちゃって。」

「オッケー！」

やまっちと赤緒さんは本とDVDを本棚に戻していく。

「山土さん、おでこだいぶ腫れてるね。」

赤緒さんがやまっちの顔を見ながら言った。そりゃあ、誰でも気になるよね、と私は心の中で言い苦笑いした。

「あー、これですか？実は...」

「さっきの地震で本が落ちてきたんだろ。痛かったんじゃない？」

やまっちが言い終わらないうちに、赤緒さんが心配そうに言った。

「...そうなんです。もうびっくりしましたよ！」

少し間をおいて、やまっちはそう答えた。

数十分後、片付けは終了した。

「みなさん、ありがとうございました。」

そらっちは深々と頭を下げ、お礼を言った。

「いいよいいよ。じゃあ、私たちはこれで一旦帰るね。あっ、汚れないように袋に入れて避けていた”いこかもん”を忘れてた。元に戻さないと！」

私は袋から”いこかもん”を取り出した。

「あ～、私も欲しい！」

元の位置に戻す前に私は抱きしめながら言った。

それを見ていた青藤さんが目を輝かせた。

「あっ、”いこかもん”あったんだ。れいらさんも海水さんも好きなの？」

「いえ、私は懸賞に当たっただけで。」

「私は好きです！持っていないんですけど...。」

「そうなんだ！私はいくつか持ってるのよ。ひとつひとつ手触りが違うのが良いのよね。特にその子の手触りが好きなんだあ。」

私が持っている”いこかもん”を指さして言った。

「そうなんですか！私もひとつでいいから欲しいなあ。」

私は名残惜しく、元の位置に返した。

私は大きいため息をつき、こう言った。

「これで本当に完了だね。」

さて、どうしようかな...。実際は何も完了していない。ここからが本番である！

私はちょうどメールの着信音があったので、それを利用した。

「あっ、そらっち。教授からメールだよ。何かレポートにミスがあったみたいで、すぐに直せて。」

私はアイコンタクトをやまっちとそらっちに送った。

やまちは薄々感づいていたので、すぐに対応してくれた。

「あの教授、ほんとに厳しいんだよね。すぐに直した方がいいよ！」

そらちは怪訝に思いながらも私たちの会話に乗った。

「えっ、どうしよう...。みなさん、ごめんなさい！少しの間、前の喫茶店で時間を潰して貰えますか？すぐにレポートを修正して教授に送りたいので。」

「それなら仕方ないね。じゃあ、喫茶店で待ってるから終わったら連絡してくれ。」

と、赤緒さんが言ったので、他の2人もそれに倣い、3人は部屋を出て行った。

「うみっち、どう....。」

そらっちの口を遮って、声に出さずにメモ帳にこう書いた。

一本当にそらちはモテモテだよ

—どうということ？

—これから私がすることを黙って見てて

そう書き残すと、私は”いこかもん”の背中をハサミで切って、手の中に入れて”あるもの”を探した。

そらっちは突然のことに口をパクパクさせている。

やまっちはそんなに驚いていない。おそらく気付いていたのだろう。

私はお目当てのものを見つけた。電池式の”盗聴器”だ！

私は窓を開け、それをベランダに捨てた。

窓を閉じ、「もう声出して大丈夫だよ。」と私はふたりに言った。

「どうということなの？」

そらっちは心底驚いているようだった。

「あの”いこかもん”に身に覚えがないんでしょ？あれは盗聴するために送られたものだったのよ。」

「そんな...誰がそんなことを...。」

「犯人は赤緒。」

「えっ...。どうして赤緒さんて分かるの!？」

「それはやまっちから説明してもらおうかな？分かってるんでしょ？」

「うん!あの人、私がおでこが腫れている理由を言う前に、本が落ちてきたからって言ったでしょ。実際は本が落ちて腫れたわけじゃないけど、本が落ちてきた事実を知っていた。それでおかしいと思ったの。それにあの人、来るときにイヤホンしてた。きっと直前まで部屋の様子を聞いていたのよ。」

「今思えば、部屋に入って来た途端、キョロキョロしてたのは、”いこかもん”の位置を確認していたからかもね。」

「それじゃあ、一昨日の無言電話は...。」

「あれはちゃんと盗聴できているかを確認するための電話だったんだと思うよ。送られた日と無言電話があった日が同じだしね。」

「じゃあ、後ろから付けたり、手紙を送ってきたのも彼なのね...。」

私は首を横に振った。

「違うんだよね...。それはきっと黄柳だよ。」

「えっ!」

これにはやまっちも驚いたようだ。

「どうということ？」

「まず、盗聴してた奴と手紙を送りつけた奴は違うってことが前提としてあるの。1通目の手紙にそらっちが夜更かした理由に勉強を挙げてたけど、実際は友達との電話だったんでしょ？盗聴していたら分かったはず。もう”いこかもん”はそらっちの部屋にあったんだから。」

「なるほど...。」

「で、さっき冷蔵庫で見たトマトは熟していて真っ赤だった。あれって、昨日買ったトマトでしょ？」

「えっ、うん、そうだけど...。」

そらっちは急に話をトマトに振られて戸惑ったようだった。

「それなのに昨日届いた手紙には緑色って書いてあった。そして、今日来た3人の中で赤を緑と認識していた人がいたの。それが黄柳。ティーカップの赤いバラをバラらしくない色って言った。バラはやっぱり赤だと思う。でも彼にはきっと緑色に見えていた。」

「それって、どういうことなの？」とやまっち。

「色覚異常っていうのがあるらしいの。赤と緑を間違えたり、緑と茶を間違えたり。はっきりしたことは分からないけど、同じ間違いをする者が近くにいた。当然疑った方が良いと思う。」

「ふたりも身近にいたなんて...。」

そらっちは茫然としている。それに追い打ちをかける言葉を言わなくはいけない。

「実はもうひとりいるの。」

「えっ！誰？」

やまっちもそらっちも絶句した。

「青藤。」

「どうして？彼女は何をしたの？」

「最近、物がよく別のところにあるって言ってたでしょ？あれは誰かが侵入してるんじゃないかって思ったの。で、彼女はそらっちの”いこかもん”を指さして、こう言った。『特にその子の手触りが好き』って。」

「そのどこかおかしいの？彼女も”いこかもん”持ってるんだから、おかしくないじゃない。」

「ううん、”いこかもん”の特徴はね、ひとつひとつ手触りが違うの。触らなければ分からないはず。それなのに”その子の”って言った。あれは触ったことがあるからだと思う。私が好きって言ったから、嬉しくてとっさに出ちゃったんだと思う。まあ、侵入方法については分からないけど、それは警察の仕事かな。」

そらっちはやっと納得したかのように言った。

「これがモテモテの意味ね...。」

「うん。そらっちのお父さんにすぐに報告しよ！」

3人はその日のうちに警察へ任意で連行され、みんな自白した。

取り調べはまだ続いているらしいが、何故あのようなことをしたかについては3人とも同じ供述をした。

”彼女に恋していた”と。

最近、恋愛事に関わる事件ばかりに遭遇する。まあ、もうないよね、と思いながら帰路に着いた。

その数日後、姉から聞かされる事件が三角関係の末の殺人事件とはこの時は思いもしなかった。